



昭和初期の佐賀県窯業試験場 ～ 技手松林靄之助のこと～



有田町中樽にあった佐賀県窯業試験場

佐賀県窯業試験場（現佐賀県窯業技術センター）の誕生は、昭和5年6月13日。有田町中樽、上有田駅近くにその前年から建築され、午前11時から落成式が挙行されました。建設に関しては多久出身の炭坑王と呼ばれた高取伊好の子息九郎と娘婿の盛から二万六千円の寄付を得、さらに有田町や町内の有志などからも多額の寄付がありました。このことから、住民の試験場に対する期待の大きさが伺えます。

初代場長は会津出身の大須賀眞蔵で、その後、同年11月に塩田町に開設された第二佐賀県窯業試験場長やさらには佐賀県商工技手も兼務していました。彼は京都陶磁器試験場で教鞭をとっていて、その時の伝習生であった京都出身の松林靄之助を同道したようです。松林靄之助は20世紀、世界の陶芸界を席卷した人物として著名なイギリスの陶芸家バーナード・リーチ（1887～1979）と深いかわりを持っていました人物です。



松林靄之助
(宇治市朝日焼資料館所蔵)

松林は明治27年3月18日、京都を代表する陶家、宇治朝日焼の十二代窯主松林昇斎の4男として誕生。大正3年4月から京都市陶磁器試験場附属伝習所に入所。在学中に全国各地の窯業地を踏査し、窯に関する知識では日本有数の技術者となりました。

その後、大正11年から製陶術の研究のため英国に留学。3年間の留学中にセント・アイヴズに滞在し、リーチから新窯の建造を依頼されて築窯しました。

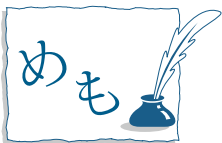
帰国した松林は、昭和5年ごろ有田工業学校でも教鞭をとり、その後、佐賀県窯業試験場の主任となり大須賀場長の片腕として活躍。さらに、塩田の第二窯業試験場長に就任して、泉山陶石の鉄分除去の実験を担当していました。

昭和8年12月25日付けの「松浦陶時報」には、松林が九大の高（壮吉）名誉教授の指導で改革したフローテーション（浮遊選鉱法のことか）の機械が国立京都陶磁器試験場のものよりも優良であるという、平野陶磁器試験場所長の談話を紹介しています。

しかし、松林は昭和7年7月23日、有田の下宿先で突然亡くなりました。享年38。「有田陶業側面史 松下静二の生涯 下」（松本源次著）によれば、同年11月27日には松林の兄が京都から有田を訪れ、「亡弟の冤を解かんとて奔走し居られる模様」とあります。

この一文からもわかるように、松林の死去に関しては様々な事情があったようですが、真相は闇の中です。しかし、海外留学までし、前途有望な弟が不可解な死を遂げた時、残された家族の落胆は計り知れないものがあつたことだと思います。さらには佐賀県の窯業界にとっても、若く有能な研究者を失ったことは大きな損失であつたことと思います。

（尾崎 葉子）



バーナード・リーチと松林靄之助については立命館大学の前崎信也さんによる『近代工芸運動とデザイン史』（2008年9月20日発行）の「伝統と科学の狭間で—イギリスでの松林靄之助の活動を中心に」、『世界の陶芸界に多大な功績—松林靄之助』（2011年2月20日付け 京都市民報）に詳細が記されています。

なお、バーナード・リーチは昭和9年8月、工芸調査団として柳宗悦、河合寛次郎、濱田庄司らとともに薩摩焼の窯元・沈壽官窯を訪れています。

また、佐賀県窯業試験場については「有田町史 陶業編Ⅱ」にあります。

皿 季刊 山

No.91 秋
2011

有田町歴史民俗資料館・館報

有田焼創業400年 プレイベント

平成23年度
企画展

江戸の底力・

広瀬山400年

～ 有田磁器生産の変遷 ～

期間：平成23年10月1日（土）～11月30日（水）

昨年度までの2年にわたる企画展では、「海揚がりの肥前陶磁」と題して、有田焼の流通の問題に焦点を当て、多くの方々にご来館いただきました。そこで、本年度は、あらためてその需要を賄った有田焼の生産について、400年の歩みを俯瞰してみたいと思います。具体的には、近年大規模な発掘調査を実施した、広瀬山地区に位置する広瀬向窯跡の調査成果をベースとし、他の地区の窯場の状況と比較検討することによって、各時代の有田の窯業の姿を出土資料を中心に描いてみたいと思います。

江戸時代の有田は、高級品の生産地としてその名が全国に知れ渡っていました。しかし、一方で、磁器が庶民層へと普及するにつれて、ブランド力を保ちながら、その需要にも柔軟に対応する生産体制を模索しました。この懐の深さが、江戸時代の有田焼の底力だったのです。

■ 広瀬山と広瀬向窯跡の概要

かつての有田皿山を構成する“山”（窯業地）の一つに、広瀬山がありました。旧西有田町域では唯一の山で、窯跡としては、広瀬向窯跡や香茸窯跡、茂右衛門窯跡などがあります。の中で、最も早く成立したのが1630年代末～40年代前半頃の広瀬向窯跡で、17世紀中頃の一時期香茸窯跡と併存し、18世紀後半には茂右衛門窯跡も築かれますが、長い間、単独で広瀬山の窯業を支えてきた中核的な窯場です。平成15年度から19年度に渡る5次の発掘調査によって、徐々にその全貌が明らかになってきましたが、それぞれ最初期の窯体である5号窯、6号窯が一時併存していた可能性があるほかは、1号窯、4号窯、3号窯、2号窯の順に造り替えられ、近代に至ったことが判明しています。こうした発掘調査の成果をまとめ、平成21年3月に発掘調査報告書を刊行しました。

■ 17世紀の広瀬山の窯業

広瀬山の製品は、比較的青磁が多いことが一つの特徴ですが、17世紀前半には他の窯場と種類や質的には大差ありません。しかし、17世紀後半になると東南アジア向けの輸出品をはじめ、少品種多量生産の傾



1) 広瀬山地区の景観（南東から）

広瀬山には、3つの窯場跡が位置している



2) 広瀬向窯跡の17世紀と18世紀前半の出土品

上段：17世紀 下段：18世紀前半

向が強くなります。これは、単に広瀬山の変容と言うよりも、有田全体の生産体制の変化に起因しており、いわゆる“内山”や“外山”の概念の形成が大きく関わっています。

■ 18世紀前半の広瀬山の窯業

理由は分かりませんが、発掘調査の成果によれば、広瀬向窯跡は1660年代頃を最後に、一旦、窯場が閉じられたものと推測されます。唯一の窯場なので、言い換えれば、広瀬山そのものがなくなったとも言えます。しかし、1700年前後までには復興を遂げ、以後、明治時代まで途絶えることはありませんでした。復興

直後の広瀬向窯跡では、染付碗を主体として、比較的良好な多くの種類の製品が作られました。海外向け製品の生産から撤退し、育ち始めていた国内需要に的を絞ったのです。ただし、これも広瀬山独自の選択ではなく、有田の生産体制の変化に伴い外山の多くの山が選んだ道でした。

しかし、海外輸出の退潮が鮮明になると、高級量産品の生産拠点として海外需要を支えた内山の窯場が、必然的に、国内向け製品の生産を強化しました。それに伴い、外山の窯場の多くでは、より大衆的な製品の生産へとシフトしたのです。生産コストを抑えるため、コンニャク印判などを用いた手描きの省略、ハリ支えを要する皿類の激減及び高台径を小さくすることによるハリ支えの省略、重ね焼きするための見込み蛇ノ目釉剥ぎなど、コストダウンのための技法が多用されました。

■ 18 世紀後半の広瀬山の窯業

18 世紀も中頃に近くなると、呉須の高騰もあってか、外面に青磁釉を掛けて正文様を省略した青磁染付碗が作られるようになり、染付製品と併焼されるようになります。そして、18 世紀後半には、さらに少品種多量生産が徹底され、大規模な窯で、ほとんど青磁染付碗のみが生産されました。これほど生産品の種類を絞った例は、小型の瓶類に集中した応法山を除けば、他の山にはほとんどありません。

■ 19 世紀の広瀬山の窯業

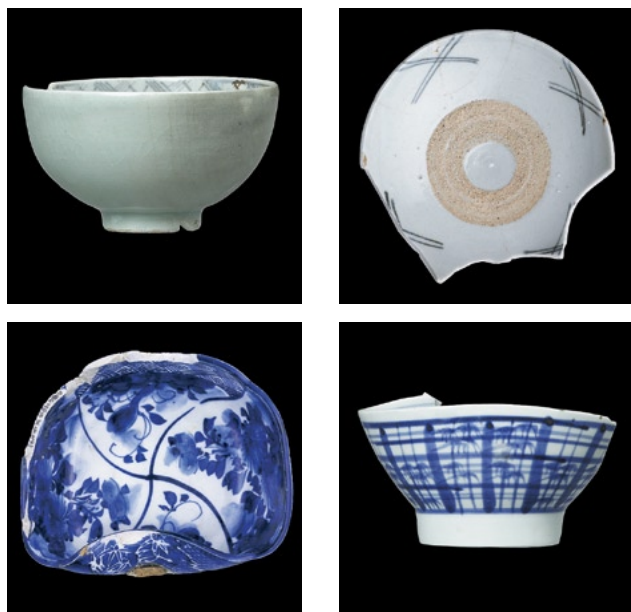
ところが、18 世紀末～19 世紀初頭頃になると、

また大きな転機が訪れました。ほぼ日本中の隅々まで磁器製品が行き渡るようになったことで、もはや磁器であること自体に大きな付加価値はなくなったのです。さらに、磁器の需要増加に伴い、日本各地に磁器生産の窯場が誕生し、日常的な地域の需要を賄うようになりました。そのため、有田の窯場では、相対的に高品質な製品の分野に、産地全体として集中する必要が生じました。広瀬山でも、再び染付製品が急速に主力製品となり、碗や猪口など生産器種は限られるものの、製品の質的には内山などと大きな差はなくなったのです。有田の中では、庶民的な製品を主体とした広瀬山の方向転換に表されるように、以後、有田の中では地域や窯による製品の質差は少なくなりました。むしろ、主力とする器種などの違いによる個性の方が大きくなったのです。特に、幕末から明治の頃には、外山の窯場の多くでは、染付や青磁染付の大皿や鉢など、大型製品が目立つようになります。広瀬山も例外ではなく、突如として碗主体の生産から切り替わります。ただし、青磁製品生産の伝統という面では、短期間の例外を除けば、脈々と受け継がれていったのです。

■ 展示の概要

以上、広瀬山の窯業の推移について簡単に紹介してきました。実際の展示では、各地の窯跡の出土品などを中心に、こうした各時期の広瀬山の窯業の変化がなぜ起きたのか、果たしてそれが有田の窯業にとってどういう意義があるのかなど、さらに幅広く、かつ、詳細な視点で示してみたいと思います。文献史料と異なり、出土資料は、自らは何も語りません。しかし、その中には人々の叡知が無限大に込められており、それをうまく引き出せれば、有田という地の経験を語る、重要な証人ともなるのです。ぜひ、企画展に足をお運びいただき、有田焼 400 年の伝統について捉え直すきっかけにでも、ご活用いただけたらと思います。

(村上 伸之)



3) 広瀬向窯跡の 18 世紀後半と 19 世紀の出土品

上段：18 世紀後半 下段：19 世紀

場 所：有田町歴史民俗資料館

開館時間：9:00 ～ 16:30 (会期中無休)

入館料：無 料

期間中のイベント

①学芸員による展示解説

10月2日(日)・11月23日(水・祝) 14:00～

②夜間開館・紅葉ライトアップ

11月19日(土)・11月20日(日) 18:00～20:00

③ふるさと学・広瀬山ば歩こう (有田町公民館との共催)

11月16日(水) 13:30～15:30

※①・②の詳細については資料館(43-2678)、③については有料(保険料100円)となり、定員がありますので有田町公民館(43-2314)までお問い合わせ下さい。

第11回 町屋の模型教室を開催しました

8月22日(月)～23日(火)の2日間にわたって、町内各小学校の5、6年生を対象に町屋の模型教室を開催しました。

平成12年から始めたこの教室も、今回で11回目となりました。応募者は10人でしたが、直前になって学校活動と重なり、残念ながら1人は辞退。9人のうち4人は昨年に引き続いての参加でした。

作業に入る前に、町並み保存の担当者から有田町の町並みの特徴や現況の説明を受け、いよいよ作業開始。スチレンボードに図面を張り、それに沿ってカッターで切り取り、のりやボンドで組み立てていく作業を行いました。絵具で色を付けたり、細い針金で樹木を



作業に熱中する子どもたち

作ったり、トンバイ堀や池などを作ったりと、各人それぞれ特徴ある町並みが完成しました。



子どもたちの作品のひとつ

今回の参加者

有田小学校	山口 玲緒くん (5年生)
有田中部小学校	金子あさひさん (4年生)
	太田 修作くん (6年生)
曲川小学校	村山 陽菜さん (6年生)
大山小学校	山本 暁路くん (6年生)
	吉村真野子さん (6年生)
	吉村香野子さん (4年生)
	桑原萌々香さん (5年生)
	桑原菜々香さん (3年生)

クリアファイル 好評販売中

このほど、有田陶磁美術館の看板娘である「染付有田皿山職人尽し絵図大皿(佐賀県重要文化財)」をデザインしたクリアファイルを作成しました。

この大皿は江戸時代の有田皿山の作陶風景を余すところなく表現していて、往時をしのばせる貴重な資料でもあります。

この一枚から新たな話題も生まれるかもしれません。価格もお手ごろです。贈り物に、また自分用にお求めいただき活用していただければと思います。



販売場所

有田陶磁美術館
有田町歴史民俗資料館

定 価

1枚 200円

花王コミュニティミュージアム・プログラム 2011助成決定

今年9月まで継続している表記助成「150年前の有田皿山ば 歩こう隊」の活動ですが、さらに3年継続助成の申請を行っていました。今回は被災地のより厳しい状況に直面している方々を応援するための「心に寄りそう文化プロジェクト」などに194件の応募があり、その中から3年継続団体5件の内の1件に選ばれ助成が決定しました。

これからの活動は、過去2年間の成果をもとに、さらに有田皿山の歴史を多くの方々と共有するための活動を行っていききたいと思います。

詳細は後日お知らせします。

季刊『皿山』

通巻91号(平成23年9月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185